

「普通の家族がいちばん怖い—徹底調査！破滅する日本食卓—」

岩村暢子(著)

新潮社 2007年10月25日刊

本書は日本の家族の食卓を追っては、その激変ぶりを報告してきた岩村暢子氏の第3弾である。今回はクリスマスと正月の食卓はどうなっているのかを、2回の調査とインタビューを通してまとめ上げたものである。

本書の結果は前著『＜現代家族＞の誕生』(勁草書房)と密接に結びついている。前著では正月の「御節」料理というものは、大半の家庭にとっては戦後になって、TVや雑誌、デパートを通して普及してきたものであり、今30-40歳代の母親達の母親世代も必ずしもその親から教えられたものではないことが明らかにされていた。本書では、今の母親たちが、いかに「御節」料理を継承することを放棄し、彼女たちの親に任せてしまうか、あるいはデパートやホテルで調達してくるようになったかを詳しく報告している。親が強制せず、元日から一般店も営業を始めるようになれば、それほど根の深い伝統でもない「御節」など顧みられなくなることは目に見えているだろう。

逆に、祖母世代、すなわち昭和30年代に青春から新婚時代をすごした人たちにとって、クリスマスはケーキを買って家族で食べるぐらいのものであったのとは対称的に、今の母親達はバブル経済の中で、クリスマスディナーに高級レストランに行き、ホテルでパーティを開き、高価なプレゼントを彼氏からもらったなどの経験から、クリスマスは特別に盛り上がるようである。もちろん、これもバブル崩壊後の低成長期の次世代の若者にとっては、意味を持たないイベントであって、将来様変わりするかもしれないという気もしてくる。

このように見えてくると、食を通した伝統が本当に根付くためには、本質的なところで宗教や生活様式などと結びついていなければ無理なように思えてくる。むしろ調査の端々に見受けられる普通の家族が、自己中心的になり、自分の言っていることとやっていることの間の齟齬に全く気づかないほど心理的に崩壊しているという事実の方が怖い。それは石川結貴『モンスターマザー』(光文社)でも明らかにされている。こちらと併せて読まれると、その恐怖感は一層増すだろう。